

# 竹内 俊吉（たけうち・しゅんきち）

## 1、プロフィール

小説家、評論家。新聞人として活動しつつ、小説、評論を書き、また文芸誌を興して、広く県内文化運動をリードした。

<生没>

1900(明治 33)年2月5日 ~ 1986(昭和 61)年 11 月8日

<代表作>

小説「海峡」(東奥日報連載)「内閣総理大臣」「あるテンポ」

評論「淡谷悠蔵君の作品と傾向」『竹内俊吉集成』

<青森との関わり>

西津軽郡出精村(現木造町)生まれ。新聞人として県内文化振興のために尽力する。

## 2、作家解説

明治 45 年出精村林尋常小学校卒業。大正4年向陽尋常高等小学校高等科卒業。

大正5年上京、転職しながら苦学。8年帰郷、五所川原、林征次郎宅での歌誌「黎明」結成記念短歌大会で、淡谷悠蔵を知る。9年渡道、室蘭郵便局に勤める。12年、帰郷、岩木川改修工事事務所に勤める。14年東奥日報社に入る。

15年「黎明」12月号に初めての小説「母」を書く。昭和2年5月、改造社主催の講演のため来青の芥川龍之介に会う。2ヶ月後、芥川の死を報道の際、その死因を自殺と推定し、スクープとなる。

3年「黎明」や「東奥日報」に小説、文学時評などを意欲的に発表。この年死去の葛西善蔵論や、淡谷悠蔵論がある。4年9月県内文芸誌を吸収し、県下統一の文芸雑誌を提唱し、5年1月「座標」の名で創刊。同誌に小説「あるテンポ」「牧場論理」などを発表。

7年6月から12月まで、「東奥日報」に連載小説「海峡」を発表する。同年8月、雑誌「座標」は、編集方針に関する不統一などにより廃刊。

15年、東奥日報社退社後に政界入りしてからも、随筆に健筆をふるい俳句などをたしなんだ。

### 3、資料紹介

#### ○「海峡」

新聞

1932(昭和7)年6月18日～12月29日

「東奥日報」夕刊、連載163回、23章からなる。作者の言葉に「『金』と『恋愛』と『義理』の渦は依然人の生活の海峡である」とある。その暮しの“海峡”を、小学校教員志村虎太郎をめぐる人間模様に捉え描く。竹内俊吉の長編小説第一作である。